海國兵談第十五巻　（現代語訳）

馬の飼立、仕込様附騎射の事

平和な世が長く続いたことから、華美の風も益々盛んである。華美が盛んになって、士風は懦弱（だじゃく）である。こうして後、武芸は地に堕ちて古（いにしえ）の儀を忘却してしまった。中でも馬は武士の足である。十分に熟達していなければならない。昨今は世の中の華美に流されて、馬の飼い方も上品になったので、第一に馬が弱い。もっとも乗る人もその真の技術を身に付けている人は少ない。現代も諸大名の家々に軍役の規定があり、人々は馬を保持しているはずなのだが、規定どおりに持つことができないのは、華美なことに出費を割いているからである。よくよく思案せよ。これ以下の条では馬の天性と昔の武士が馬を持ち易かった理由を記す。先ずこれを読んで、昔のことを知れ。

○馬は元来山野の獣である。野草を食らい、水を飲み、風雨を受けて生を遂げるものである。このことを常に意識して、野草で飼育した馬は、姿形は枯れたように痩せていて見苦しいけれども、人を背負って奔走する力は、天然にして馬本来のものである。このところを会得して飼育すれば、現代のようにあれこれと物を入手することもなくして、人々が馬を持ち易いものであることを理解せよ。

○昔は小禄であっても武士でさえあれば、必ず馬を持っていた。もっとも持てる理由があったのである。その理由と云うのは、繰り返し述べてきたように土着であったからである。土着であるから、秣（まぐさ）に事欠くことがない。時には糠（ぬか）、大豆、麦、稗等を与えるにせよ、自らの手作物なので、他所から仕入れる必要もない。爪、髪、四足等も自分で手入れするので、別当、口取りなどと云って別に人を雇い入れることもない。

このようであるから、小禄であっても馬を持てたのである。今の世でも百姓を見よ。わずかに田畑の四～六反（約四千～六千㎡）しか持たない者でも、馬を容易に持てるのである。これは土着だからである。また昔の軍役に、六貫一匹と定めたことがある。六貫は今の知行で約六十石である。これ程の小身であっても馬を必ず持っていたのである。今の世では六百石であっても馬を持つことは難しい。その理由は何度も云ったように、全ての武士たちが知行所を離れて、それぞれの主君の城下に居住しているので、人が集るに従って万事が華美になった。その華美に慣れて馬を飼うことも、古来の意義をほとんど失ってしまった。又、近年になって馬役という云う者ができて、代々の家業として馬の事を司るのが世間一般の風習である。しかしながら、この馬役と云う者は、あくまで凡俗の匹夫なので、古来の意義などは夢にも知らず、ただ当世流の馬場乗りをするだけのことである。そうであるから、ただ単に口向（くちむき）、足振（あしふり）を大秘訣と心得るだけであり、全てにおいて武用の真法を失っているのである。又、人の君主たる者、政（まつりごと）を執る者等にも俗人が多いので、このような亜流を改めようとする意志もなく、馬の事はその馬役に一任しているので、自然と馬役等に権威が付いて、何かよく分からないが、その言うところを人々が用いるのである。つまるところ、武術が衰微して武芸を一部の芸達者に任せるので、このようなことに成り果てたのである。

さて、馬は武備の根本である。そうであるから異国では千乗の国、万乗の国等と云って、車馬の数によって諸侯の大小を定めている。（今の世で幾万石と云うようなものである）又、大司馬と云う官位も総大将のことである。それを総大将と云わずに大司馬と云うことも、馬が軍務の根本をなすので、兵馬を司る役と云うことを強調して司馬と云うのである。昔の日本でも左右の馬頭（むまのかみ）があり、左右の馬寮を司っていた。これは大将に次ぐ官位であっ

て、甚だ重い職務である。とうてい現在の馬役のような、凡卑に務まる役職ではなかった。これらは皆、馬というものを重んじていたからである。このように大切である馬を、凡俗で卑しく見識が狭い馬役にのみ任せておいたのでは、ほとんど物の役に立たないだろう。心ある君主や政を執る者は、方法を大昔のやり方に習ってあらゆる工夫を加え、乗り方を定めて馬を調教しておくべきであり、これを高位高禄の者は云うに及ばず、全ての馬を持つ者が常識とすべきである。そこで先ず、今の世の馬には（昔の馬に比べて）欠けている点が十六あることを知らねばならない。これを知って調教すれば、馬術もその本質をほとんど失わないであろう。一には普段の責馬（＝馬を乗りならすこと）の法があまりにも拙い。責馬は毎日乗るのが最も良い。四つの乗り様がある。馬場乗り、遠乗（えんじょう）、当て物、乗廻しである。二には普段から上等な食糧に慣れているので、たまたま粗末な食糧で飼育すればこれを食べず、すぐに疲れるようになる。三には遠乗を仕込んでいないので、まれに遠乗をすれば早く血が下り、あるいは息が尽き、あるいは食わなくなって役に立たない。四には普段は口を取らせ鐙（あぶみ）を押えさせて乗り降りするので、独り乗りをすれば馬が動いて乗り難い。五には普段風雨寒暑にあてていないので、これを犯して行動させれば、疲れたり病気になったりする。六には普段山坂で乗っていないので、曲がりくねった山坂の道に苦しみ、すぐ疲労する。七には騎射を教えていないので、たまたま弓・鉄砲・太刀打ち等を馬上で実施すれば、驚いて駆け出す。八には鳴物に慣れていないため、音声に驚き易い。九には目立つ物を見習わせていないので、彩色や異形に驚く。十には水馬（＝馬が泳ぐこと）や船に熟達していない。十一には糠や大豆を多く与えて肥え過ぎているので、すぐに汗をかき、すぐに疲れる。十二には普段靴を履かせて乗るので、たまたま素足の

まま乗れば、足裏を痛めて奔走が不自由である。十三には普段から同居、同食等を教えていないので、馬同士が近寄れば、咬みついたり蹴ったりして騒ぐ。十四には牝馬を見慣れていないので、まれに牝を見れば躍り跳ねる。十五には溝、堀切、岸等を飛び越えることを知らない。十六には馬甲の類を見習わせていないので、これらの物を装着することができない。馬甲は軍用で最も重要な馬具であるから、決して忘却することがあってはならない。これら十六項目は全て、当世の馬に欠落しているところである。武に任ずる人であれば、大小高下を問わず、常々心掛けておくべきことばかりである。

これより十六の仕込み方を記すので、さらに考察せよ。又、近年馬乗りの家では軍馬の伝と云うものが作られて、これを大秘訣として、起請（＝物事を企て、上申してその実行を上級官司に対して請うこと）に起請を重ねて相伝している。甚だしきは公儀（＝朝廷、幕府）に達し、広原に幕などを張り廻らせて相伝することもある。いかに世の中に武術が衰え廃れたとて、これ程おかしなことがあってはならない。何とも恥ずかしい限りである。少しでも武術に着目したならば、別段に軍馬の伝などと云うことも、無用のものであることが分かる。ただ古戦軍記等を多く見聞して、昔の武士が馬を自由自在に取り廻していたのを手本として、利害得失を考えてみればよい。義経が鵯越（ひよどりごえ）を下ろし、又は渡邊において海を泳がせ、かつ又新田義宗が足利家を追って、坂東道四十六里（大道七里半＝約三十㎞余り）を半時で追いついた所業などは良き師範である。この心掛けを基本にして、各人が好みに合わせて、物の役に立つように仕込めばよい。巻初から繰り返し云ってきたように、馬は武士の足であるから、先ず何よりも考慮すべきことである。これを怠ってはならない。

○馬を仕立てるのに二つの方法がある。一つは牧場を設けて野子を仕立てるのである。もう一つは厩子（うまやご）である。二法ともに世間一般に行なわれていることなので、今さらその説を述べるには及ばない。ただ国の寒暖によって、少々手立てに相違があるまでのことである。さて又、一国一郡をも領する人は、自国において馬を仕立てたいものである。『春秋左氏伝』に（僖公十五年）異産に乗っているのを謗（そし）っていることからも分かるであろう。異産とは、他国の馬のことである。

○今日の馬場乗りは、昔の庭乗りの遺法（＝名残の方法）である。前述したように、古の武士は皆達者であることを本分として、やたら乗りを第一としていたが、饗応あるいはなぐさみの為などに、貴人、高位の前にて馬に乗るとき、やたら乗りではその様子が見苦しく、その質も野卑であることから、庭乗りの方式で乗ることも武士の嗜（たしなみ）とするようになったのである。本間孫四郎が馬場殿の庭上に龍馬を乗りこなしたことなどを考えてみよ。そうは云えども、現在のように一概に馬場乗りのみを馬術と心得ていたのではない。やたら乗りを基本として、余裕があれば儀式の乗り方をも学んでおいたのである。これが武馬（＝武士の馬術）の順道である。

○馬場乗りも今の世の仕方は、その一を知ってその二を知らないところがある。その理由は口向、足振のみを重視して、当て物（＝合戦における乗馬）の術はきわめて疎かである。そうであるから、馬場乗りにおいては上等な馬であっても、物に恐れるために戦場では乗ることができないこともある。これは平素から当て物をしていないからである。これがその一を知ってその二を知らないところである。思慮すべし。

○馬は天性として驚き易いものである。このことから「敬（つつしむ）」と「馬」の二文字を合わせて「驚」の字が作られたのである。その意味は推して知るべし。すでに上述したよ

うに、口向、足振がどれ程見事であっても、物に驚く馬は、ほとんど物の役に立たない。古今馬の物怖じによって損害を受けた例が多い。注意せよ。これ以下、馬の乗り方について十六項目を記す。熟読して眠気を覚ませ。

○現在では細くて長い地面を馬場と名付けて、馬に乗る所としているが、これ又真の馬場と云うものではない。真の馬場は、狭いものでも六～七町（約六五四・五～七六三・六m）四方、大きなものでは百町（約十一km）四方にも構成して馬のみに限定しない。人馬と器械を備えて練兵する場所とする。これが真の馬場である。

○馬場乗りは上述したように、庭乗りの名残の方法であって、馬に行儀を教えるまでのことであるから、現代流の馬場であっても事足りるのである。先ずその乗り様は口向と足振を重視し、馬に振りをつけて行儀を教えておくことである。ただし多く乗ってはならない。ただ馬の行儀を崩さないためだけに少しずつ乗っておくのが良い。

○二には遠乗（えんじょう）である。これは近くて三～四十里、大道で五～六里（約二十～二四km）である　遠ければ百里大道で十六～七里（約六四～六八km）である　百五十里大道で二十四～五里（約九六～百km）である　も乗れ。このように大乗しても馬が疲れないようになるのがその究極である。これには五段の息、三段の汗、又走足、躍足、千鳥足、鹿子懸け等の足色、また息合薬にもいくつか方法がある。精密なことのようであるけれど、しばしば乗っていればこれらの事も自然に会得することができる。その証拠には古代、文字が読めなかった数万の荒武士でも、如何ほどもなく各々右に掲げた数件をちゃんとわきまえていたではないか。ただ頻繁に馬に乗って、乗りながら覚えていったのである。これ以外に秘訣はない。ただただ乗ればよい。

○三には当て物である。これには例の大馬場において旌旗（はた）、鐘、太鼓、甲冑（よろいかぶと）、弓、銃（てっぽう）の類は云うに及ばず、抜き身の刃物、松明（たいまつ）等、それら以外にも異類、異形の物まで

一面に立て並べ、乗る人も甲冑を着用し、馬上において弓や銃を発し、太刀打ち、鎗打ち等をせよ。これこそが馬の調教で最も重要なことである。このように調教しておくことは、合戦の馬だけではなく、平素の乗馬でも右記のように仕込んでおけ。これは馬に乗る者が慎んで行なうべきことである。これを真の騎射騎術と云うのである。

『春秋左氏伝』にも（僖公二十八年）虎の造物を陣前に押出し、敵の馬を威して踏破ったという事例がある。慎むべし。

○四には乗廻しである。これは早足に乗らず、地道に乗って三十里(約一二〇㎞)、四十里(約一六〇㎞)、五十里(約二〇〇㎞)を乗廻し、馬の気力を養っておくことである。

○五には強風、雨、雪等、又は酷寒酷暑の時節に終日乗廻して、このような悪天候に馴らしておけ。普段は箱入りに仕込んでおいた馬を、急にこれらの悪天候に曝せば、たちまち疲れて、病気になるものである。

○六には山坂や幾重にも曲がりくねった山道を乗廻して悪路に馴らしておけ。必ず平地だけで乗ることがないようにせよ。

○七には騎射を十分に仕込んでおくこと。しかしながら当世流の騎射ではない。第三項目で述べたように、馬上での荒技（あらわざ）のことである。当世流の騎射のことは、この先で詳しく論じているとおりである。

○八には貝、太鼓、銅鑼（どら）、鐘、喇叭（らっぱ）等、その他種々の鳴物を馬上で打ち鳴らして馬の耳を鍛えておけ。オランダ流は鐘や太鼓を馬に取り付け、馬上にて打ち鳴らす。日本でも昔、旗持ちは皆馬上において旗を持ったのであり、今も朝鮮では馬上旗である。

○九には甲冑は云うに及ばず、旗、指物、母衣（ほろ）の類、又は抜き身の刃物及び松明（たいまつ）等を馬上に振り立て、馬の眼を馴らしておけ。

○十には川渡し、水馬等を仕込め。もっとも船に載せて水上を往復し、あるいは船から水中に追い下ろして、船で引きながら泳がせること等も教えよ。

○十一には中肉になるように飼育せよ。肥え過ぎた馬はすぐに汗をかき、早く疲れてしまうので、遠乗りするのに不利である。絶対に肉を多くつけさせてはならない。

○十二には平素から徒足にて乗るようにせよ。沓を履かせて乗るのを習慣としてはならない。松前は藁が無い土地なので、馬に沓（くつ）を履かせることがない。その地は酷寒で石地であるが、足裏を痛める馬はない。これは石になれて足裏が堅硬になったからである。平素岩石山で働く人の足裏が土踏まずまで皮が厚いようなものである。

強いて足裏を痛めたならば、金履の伝がある。その方法を頭注に記す。

〔頭注〕五陪子十匁（三〇・七五g）、鉄屑十五匁（五六・二五g）、胡粉（鉛の焙りかす）六匁（二二・五g）、山薬七匁（二六・二五g）、これら四つを細かい粉末にして、鉄漿により膏薬のように煉り合わせて、蹄裏に貼る。明日に乗るのであれば、今宵に張って沓を履かせておくのである。

○十三には平素から同居同食を仕込んでおくこと。昨今の馬はこれに慣らされていないので、馬同士が近寄れば咬みついたり蹴ったりして騒ぎ、大いに不自由なことになる。上記のように仕込んでおけば、軍中等においては五匹も十匹も一つの厩に追い込んでおくことができ、便利である。

○十四には牝馬を見馴（な）れて、牝に近づけても飛び跳ねないように仕込んでおけ。今どきの馬は、ほとんど牝を見馴れていないので、まれに牝を見れば飛び跳ねる。甚（はなは）だ困ったことである。また大昔には日本でも支那でも牝を乗馬に用いていた事が諸書に見られる。今も相馬家の武士は牝に乗ることが多い。これは古風の名残である。

○十五には溝、堀、切岸等を飛び越えることを教えておけ。これらを平素から教えておかずに、事に臨んで急に飛ぶことなどは、絶対にできないことだと知れ。オランダ流乗馬の形では、堀を飛び、土居を超え、又は馬に立って歩かせることなどを仕込ん

でおくのである。精緻であると云えよう。これらも又、仕込んでおいて損はない。

○十六には時々馬甲（うまかぶと）を着せて、遠乗りをせよ。これ又平素から実施して見習わせなければ、着せた馬も驚き、傍らの馬も驚くものである。何よりも馬甲は軍用の馬具で最も重要であるから、武備に係わる者は心掛けて製作しておかなければならない。

右の十六条は馬の調教でも特に重要なことである。断じて私の杜撰な無駄言ではない。武を以て任ずる人は怠ることがあってはならない。これ以下、馬について二三のことを記す。さらに工夫を加えて仕込むようにせよ。